

Why so serious?

thekey

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ヒーロー鮑和社会で”彼”は復活した。

目次

## ビギンズナイト

「……うん。——っ!？」

目を開けると、ひんやりと冷たい空気を感じた。  
薄く煙が張っているが、むき出しで所々シミのあるコンクリートで  
囲まれた部屋ということは分かる。

思わず立ち上がるうとしたが、手足が何かに固められて身動きが取  
れない。

下を向くと、皮でできたベルトで椅子に四肢を固定されていた。

「ちよっと、なによコレ!?誰か!誰かいなの!!」

力の限り叫ぶも、ただ狭い部屋に自分の声が響くだけ。

辺りを見渡しても扉のようなものは見つからない。

もしかしたら死角である背後にあるのかも……。

ピツ!という機械音がなり、体は反射的に反応する。

すると目の前には仮想スクリーンが一つ現れた。

映されているのはただの黒い画面。いったい何がしたいの——

『どうも初めまして奥さん』

「——キヤア!!」

突然画面に男が映りこんできて思わず甲高い声を出して驚いてし  
まう。

そこに映っていたのはピエロのようなメイクをした男だった。

肌は全体が白塗りで目の周りは黒く塗っており、唇は血のように  
真っ赤で米神まで紅を引いている。

まるで常に笑顔を浮かべているようだ。

『おいおいおい。人をの顔を見て驚くなんて失礼な奴だな。俺だって  
傷つくんだ』

「此処から出して!」

『まあ待て、少し話をしようじゃないか。俺はジョークとお喋りが大  
好きなんだ』

「知らないわよ!何がしたいの!!」

『何がしたい?そうだな……さつきも言ったが、俺はジョークが好き

だ。それも背骨が逆なでされるようなドギツイのがな』

「そ、それがどうしたのよ?」

『ショーだよ!爆笑必死抱腹絶倒な最高のショーをしたいのさ。だが…あんただけじゃ役不足だからアシスタントを用意した』

男はパチンと両手で指を鳴らすと、男が映っている画面の両隣に新しいスクリーンが増えた。

そこに映っているのは――

「悠人!?雅人!」

私から見て、右手に長男で12歳の悠人。左手には次男で9歳の雅人が私と同じように椅子に拘束されていた。

『お、お母さん!?それに雅人!!』

『だずげでおがああざん!!』

「ちよつと、どういふことよ!」

どうやらお互いが画面で見えているらしく、悠人は私と雅人を見て驚き、雅人は泣き叫んでいた。

「息子たちを放して!!」

『なにもそんなにはしゃぐことじゃないだろ?仲のいい親子のご対面だ。喜んでくれると思っただが――』

「ふざけないで!!」

『なんだ?ただ母と子供の愛の深さってやつを試そうと思っただけじゃないか』

男は肩をすくめてあきれた様子だ。

愛の深さを試す?訳も分からないまま人を拘束して何を言っているの?

『ねえええ!!だずげでよお!!』

『おいおいボウズ。お前も男の子だろ?泣くんじゃなくて笑ったらどうだ。笑ってるやつがこの世で一番つえーんだろ?お前らが大好きな”オールなんちゃら”みたいによ』

どうだ?ん?と男は雅人に話しかけるも君の悪い男の顔では逆効果だった。

一層泣き声が大きくなったのを見て男は首を傾げ、まあいいかとは





『お母さん!?!』

息子たちの身を守れるなら命だって惜しくない。私は画面の前の男に提案する。

「誰か一人の命が欲しいなら——私の命をあげる。だから……息子たちは——」

『おいおい、実に感動的じゃあないか! 子供のためなら命を懸ける親の鏡だなあ。だが同時にこの年で親を失わせようとする酷い親だ』

男はまるで涙を抑えるかのように目頭を押さえる。しかしその動きが大仰で、どこからどう見ても演技にしか見えない。

なにがひどい親だ。お前がこうしたんだろう!

『それで子供たち諸君? 君達のお母さんはこう言ってるけど?』

『だめだよお母さん!』

『お母さん! だから僕を選んで!! 雅人と生きて帰って!!』

二人は泣き叫びながら私を説得しようとする。

だが私の覚悟はもう済んでいる。

「大丈夫よ。きつと私が死んでもお父さんが何とかしてくれるから。

悠人……雅人を宜しくね。雅人……風邪をひかないように——」

『おっと時間だ!』

ポポンツ!!! と何かが弾けるような軽い音が重なって聞こえてきた。

「——へ?」

目の前の現状が理解できない。

先ほどまで映っていた息子たちの姿は消え、同じ画面には赤く染まった頭の無い人形だけが映っている。

その人形の首元からはリズムよく赤い液体が天井めがけ噴出している。

「あれ……? 悠人? ……まさ、と? どこに行つたの?」

『最低なお母さんだなあ? せつかく片方は生かしてやろうと思つたのに両方見捨てるなんて……つてもう聞こえてないか。なんせ耳も眼も鼻も脳みそも無いもんなあ!!! ホント最高だ!!!』

目の前に映った男がH A H A H A!! と大きな声で笑つてとても楽しそうだった。





明らかに正常ではなかった。口からはよだれを垂らしながら途切れ途切れに笑いをこぼしている。そしてその顔は引きつった笑顔のまま一切崩れない。

「ハハハッ……ハハ！」

「うそ……だ……」

壊れていた。生きながらにして妻は壊れていた。

私はあまりの絶望に自然と膝を落としてしまう。

きつと妻のあの顔を一生忘れることはないだろう。

なぜなら——犯人の顔にとってもソツクリだったから。

『神野区の悪夢から1年、敵の数は増加の一途をたどり——』

『かつてのヒーロー飽和状態が嘘のようですねえ、斎藤さん』

『ええ、これもひとえに奴のせい——』

『日本史上最大の敵！復活した”犯罪王”にせま——』

『2世なんて呼ばれてますがね？やり口、残虐性、計画性どれをとっても本人としか言えないんですよねえ』

『しかし奴が生きていた時代はもう遙か昔ですよ？それこそ”生き返った”とでも——』

『前年と比べ死傷者は倍に近い数になり、中でもヒーロー本人を含めた関係者の死傷者数だけでは4倍——』

目の前でテレビのチャンネルはめまぐるしく切り替わる。

ただ放送している内容はどれも似たり寄ったりだ。現在日本一と言われる敵について——。

神野区での事件後、敵連合など名だたるヴィランと共に彗星のごとく現れたソイツは残忍な事件を頻繁に起こし、一瞬で日本史上最悪の敵。”犯罪王”と呼ばれた。

今でも目の前でチャンネルは切り替わり続ける。

なぜリモコンを動かす手を止めないかだって？

俺に言わないでくれ。

俺がりモコンを操作しているわけじゃない！

次々に切り替わるチャンネルと共にコツ、コツ、と革靴の音が近づいてくる。

しかし俺は振り向かない。いや——振り向けない。

なぜなら椅子に縛り付けられ、頭も固定された状態だからだ。

コツツ、と俺の真後ろで足音は停まる。

すると頬にひんやりと皮の感触があった。どうやら皮手袋をはめた手が添えられたようだ。

ペチペチペチと頬を叩かれる

「どこを見ても俺のことばかり……人気者はツライねえ」

今の日本人なら誰もが知っている声に全身から冷や汗が流れ出る。

俺の頬を叩いていた男はバツと俺の前に顔を出した。

まるで血で口をかいたようなメイクが印象的な顔を——

「Why so serious?」

復活した犯罪王。日本史上最悪の敵。

敵名”ジョーカー”